

私が『すてきな三にんぐみ』を薦める理由 角田将太郎（NPO 法人子ども哲学・おとな哲学アーダコーダ）

子どもたちと哲学対話をする時に、『すてきな三にんぐみ』という絵本をよく使う。相手が幼児であれ、高校生であれ、「なんでもいいから一冊絵本を選んで持ってきてくれ」と言われたら、たぶんこの絵本を持っていく。哲学対話をするときの絵本の選書に困っている方にはこの絵本を薦めたい。

1. 『すてきな三にんぐみ』とは

『すてきな三にんぐみ』はフランスの絵本作家、トミー・ウンゲラーによって描かれた絵本である。物語は三人の泥棒たちを中心に展開していく。泥棒たちは村の人々を襲い、宝石や金銀を強盗していた。ある夜、いつものように村に盗みをしに行くと、そこで一人の孤児、ティファニーちゃんと出会う。何も盗むものがなかったため、泥棒たちはティファニーちゃんを大事に抱えて去っていく。次の日の朝、宝の山を見つけたティファニーちゃんは泥棒たちに「これ、どうするの？」と問いかける。宝の使い道をこれまで考えていなかった泥棒たちは相談し、城を買い、捨て子や孤児を集め、城で暮らすことにする。子どもたちは成長し、むらは大きくなり、泥棒たちの姿を模した塔が建てられ、その塔が描かれたページで物語は終わる。

2. 『すてきな三にんぐみ』を読んだ後の哲学対話

この絵本を読んだ後に哲学対話をする则様々な問いが溢れ出てくる。

「三人組は悪者と言えるだろうか」「ティファニーちゃんを盗んだ泥棒たちの行為は悪か」など、この物語の主題を汲み取った問いは、善悪の意味に関する対話へと向かわせる。

出てくる問いは善悪に関するものばかりでもない。「なぜ子どもたちの服の色がすべて赤いのか」や「ティファニーちゃんの帽子の色がページをまたいで変わっているのはなぜか」といった問いもよく出てくる。絵本の中の絵に注目すると色づかいが不自然なように思われる箇所がいくつかある。作者が色に対して何らかの意味を持たせているようにも感じられる。

3. 『すてきな三にんぐみ』を使った哲学対話がうまくいく理由

同じ絵本を読んだとしても、その後の哲学対話が同じものになることはない。ただ、『すてきな三にんぐみ』を読んだ後に行う哲学対話がつまらなかったことは一度もない。考えるに、それには理由がある。

まず、絵本の「簡潔さと明瞭さ」が挙げられる。登場人物は少なく、物語の展開がわかりやすい。使われている語彙も特に難しいものはない。絵も明瞭であり、物語の理解を助けている。絵本が簡潔かつ明瞭であることで、絵本の内容を全員が共有することができる。それにより、哲学対話をするにあたって共通の土台を作り出すことができる。

次に、物語の内容に「日常性」があることが挙げられる。こどもたちは日常からかけ離れた題材に対して話をすることに意欲をあまり持てない。その観点からして、『すてきな三にんぐみ』において主題となる「盗みの善悪」は馴染み深く、絵本の世界と日常の世界を往復して考えることができる。

最後に、物語に「解釈の多義性」があることを大きな理由として挙げたい。行為の善悪はもちろん、泥棒たちの心情、物語のその後の展開など、この絵本には読み手に対して様々な解釈を許す余白が多くある。それだけでなく、余白が物語を理解するにあたって重要な要素となっており、その余白を何らかの形で解釈しなければ、物語を筋道立てて理解できないようになっている。したがって物語を理解したい読み手は、なんらかの解釈をすることに迫られる。読み手は多種多様な解釈をし、その解釈の違いは違いの理由を問う問いを生む。その問いによりこどもたちは、なぜ自分がそのように解釈したのかを考える契機を得ることになる。

4. おわりに

『すてきな三にんぐみ』を読んで哲学対話をする、楽しい哲学対話になる。ただ、もちろんそれは必ずではない。当たり前だが、時と場合によって話の展開は変わる。さらに、どんな場にしたいかによって選書の基準も異なる。本稿の内容はあくまで参考程度にしてもらいたいが、絵本の選書に困ったら参考にしてもらえればと思う。

ⁱ トミー・ウンゲラー『すてきな三にんぐみ』（1969, 偕成社）ⁱ